

この絵の作者のモネは、1865年、パリに生まれました。その後、ル・アーヴルという港町で、当時珍しかった戸外制作に没頭し、16歳の時、本格的に絵を学ぶためにパリへ出ます。そこで美術界の現状に不満を抱くルノワールやドガなどと意気投合し、新しいスタイルの絵画の競作を始めます。ここから、水や光、大気などの移ろいを繊細に描くようになり、生涯にわたって一瞬の光の移ろいの特徴にした絵を描き続けます。

この作品には、日傘をさした女性と、その奥の帽子をかぶった少年が描かれています。この二人の表情が似ていることから、二人は親子ではないかと考えました。また、二人の目が少し物悲しく見えたので、何か共通の悩みをもっているのではないかと推測しました。そして、二人の体は作品の左側を向いているのに、顔だけこちら側を向いていることから、散歩をしている際に、誰かに呼ばれてふと振り向いたのか、何か気になるものを見つけて振り返ったのかという二通りの推測を立てることができました。女性の日傘の色が草原の色と同じなので、女性はこの草原に何か大切な思いを抱いているのではないかと想像しました。草花がたくさん咲いていて、女性が白いドレスと上着を重ね着していることから、この時期は冬と春の境目だと思えます。この作品は雲の動きや風に揺らめく草花が、細かいタッチで表現されていて、時を超えてこちら側まで臨場感が伝わってきました。また、全体的に爽やかな色で描かれているため、草原を吹き抜ける風の存在がより一層際立って見えました。

私がこの作品を選んだ理由は、風の動きと光の強弱が繊細に表現されていて、静止画なのに動きが感じられ、風の音が聞こえてきそうなほど臨場感が伝わってきたからです。また、この絵の中の二人が振り向く前と振り向いた後の行動が思い浮かび、たくさんの想像を巡らせることが

できました。モネは、この作品以外にも水、光、大気などの移ろいを見事に表現した作品を数多く残しています。なので、ほかの作品も鑑賞して、時を超えても伝わってくる臨場感をもっと味わいたいと思いました。

